

氏名	阪無 勇士
学位の種類	博士 (心理学)
学位記番号	院博甲第 20 号
学位授与年月日	2019 年 3 月 18 日
学位授与条件	学位規則第 5 条第 1 項該当
学位論文題目	一時保護所における児童への受容的な関わりに関する研究
論文審査委員	主査 石隈 利紀 東京成徳大学大学院 教授 副査 徳山 美知代 東京成徳大学大学院 特任教授 石村 郁夫 東京成徳大学大学院 准教授 江口 めぐみ 東京成徳大学大学院 准教授

## 1. 論文概要：(1) 目的、(2) 方法、(3) 結果及び考察

### (1) 目的

児童への関わりに関連する児童相談所および一時保護所の現状を整理し、一時保護所に求められる児童への受容的な関わりに関する以下の課題を抽出した。一つ目は、一時保護所における職員による児童への関わり方の問題が報告されていること、二つ目は、効果的であると考えられる受容的な関わりを難しくさせる要因が未検討であること、三つ目は、一時保護所における受容的な関わりを促進させるモデルの構築と検証が遅れていること、四つ目は、児童のトラウマや愛着の課題にとって職員による受容的な関わりが効果的であることの未検討、であった。それを踏まえて、一時保護所における受容的な関わりに関する問題状況を明らかにし、そのうえで職員の受容的な関わりを促進する仮説モデルを構築することを目的とし、研究 1~8 の 8 個の研究を実施した。

### (2) 方法、結果及び考察

**研究 1** 7 施設の一時保護所に勤務する 76 名(男性 29 名, 女性 46 名, 不明 1 名, 平均年齢 33.00±11.90 歳)を対象に、質問紙調査を実施した結果、感情労働はバーンアウトを高める危険因子であるが、児童へ共感的・ポジティブに関わることで職員の本来感を高め、バーンアウトを低減させることが示された。

**研究 2** 7 施設の一時保護所における保護所職員 96 名(児童指導員 26 名, 保育士 30 名, 心理 6 名, 夜間指導員 16 名, その他 2 名, 無記名 16 名, 平均年齢 32.31±11.63 歳)を対象に質問紙調査を実施した結果、児童への関わり方は「指示的な関わり方」, 「受容的な関わり方」, 「構造的な関わり方」の 3 つに分類され、最も高い効果を得られる「受容的な関わり方」の採用頻度は最も少なく、最も効果の低い「指示的な関わり方」を 9 割以上もの職員で採用される状況が明らかとなった。

**研究3** 7施設の一時的保護所における保護所職員 96名(児童指導員 26名, 保育士 30名, 心理 6名, 夜間指導員 16名, その他 2名, 無記名 16名, 平均年齢  $32.31 \pm 11.63$  歳)を対象に質問紙調査を実施した結果、関わりの頻度と効果はともに「受容的な関わり方」が最も高いことが示され、児童の内在的な問題へは効果的に関わっている現状が明らかとなった。

**研究4** 7施設の一時的保護所における保護所職員 97名(児童指導員 26名, 保育士 30名, 心理 6名, 生活指導員 16名, その他 4名, 無記名 15名, 平均年齢  $32.31 \pm 11.63$  歳)を対象にして質問紙調査を実施した結果、児童の外在的な問題は「対人関係の問題」と「感情調整の問題」に大別され、問題行動へと「指示的な援助観」をもって関わるのみならず、「受容的な援助観」をもって関わることで問題行動の予防に繋がること示唆された。

**研究5** 1施設の一時的保護所職員 14名(児童指導員 6名, 保育士 6名, 生活指導員 2名, 平均年齢  $31.43 \pm 11.9$  歳)を対象に面接調査を実施した結果、職員が受容的な関わりができるプロセスには、「試行錯誤で獲得するプロセス」、「技能の幅が広がるプロセス」、「組織からサポートを受けるプロセス」の3つのプロセスを経ることが示された。

**研究6** 7施設の時的保護所職員 73名(児童指導員 24名, 保育士 22名, 児童心理司 4名, 生活指導員 4名, 夜間指導員 19名, 勤続年数  $4.05 \pm 5.27$ )を対象に質問紙調査を実施した結果、バーンアウトした職員が強制的な関わりに至るプロセス、働きやすい職場や児童への愛情がバーンアウトを予防し、職員の受容的な関わりを促進させるプロセス、多様な関わり試みる中で受容的な関わりに至るプロセス等が示された。

**研究7** 1施設の一時的保護所における小学3年生以上の入所児童 50名(男子 27名, 女子 23名, 平均年齢  $12.06 \pm 2.26$  歳)を対象に質問紙調査を実施した結果、研究5で概念的に示された「職員の受容的な関わりを促進するモデル」が児童側から検証し、職員の受容的な関わりによって生活安心感・安全感に対して効果があることが示された。

**研究8** 一時的保護所1施設における小学3年生以上の入所児童 101名(男子 49名, 女子 52名, 平均年齢  $12.16 \pm 2.34$  歳)を対象に質問紙調査を実施した結果、児童が愛着形成やトラウマに関連した問題を抱えながらも、職員からの受容的な関わりを受けることによって、問題行動は軽減され、適応行動が促進されるプロセスが明らかにされた。

### (3) 総合考察

本研究では職員による受容的な関わりという視点から捉え直し、児童福祉に望ましい児童の自律的な成長を支えるシステムの構築や職員ケアの視点も重要であり、児童・職員・施設が互いに影響し合う、職員による児童への受容的な関わりモデルを構築することができた。

## 2. 評 価：

---

本論文は、一時保護所を対象に8個の研究から構成されており、一時保護所を対象にした希少なデータを精力的に聴取している。とりわけ、保護所職員のみならず児童へも実施しており、我が国においても、初となる一時保護所を対象にした学位論文であり、非常に高く評価できる。また、採用された方法論に関しても、自由記述によるKJ法、共分散構造分析、半構造化面接とM-GTA等の質・量的に検討しており、最初に探索的に実施したうえで、量的にモデルの構築を実施しており、恣意性を排除する工夫が見られている。さらに、何よりも、一時保護所職員である著者の職歴や経験を活かして、現場でとりわけ忘れられている児童への受容的な関わりが最も効果が高く、それは職員ならびに児童側からも効果が認められ、トラウマ症状を軽減させ、向社会行動を促進させるものであることが示されている。本論文を構成する研究の3本は学術雑誌に投稿され、1本は印刷中、1本は修正採択、1本は審査中であり、高い研究業績も認められる。以上のことから、博士論文として新しい理論の構築、ならびに当該分野における独創性のある着眼点、新しい研究知見の提示、さらには適切な研究方法の使用、高い水準の研究業績の観点から、博士論文学位審査基準に十分に満たすものであると評価できる。

## 3. 最終試験結果：

---

2019年2月9日、公開において、論文提出者より報告を受け、質疑応答が行われた。その結果、最終試験に合格と判断された。

## 4. 結 論：

---

論文審査と最終試験結果の評価に基づいて、本論文は博士の学位に値すると判断された。

2019年2月18日